4章

【問題】（演習／共通問題）

出典…竹田青嗣『自分を知るための哲学入門』／筑波大学　01年

文章略解

人間は誰でも自分自身に対してロマンを持つ。そしてそのロマン的幻想は、必ず他者の目によって無化され、その人の自我の不安をもたらす。そこで〈自我〉の殻を作って防衛をはかろうとすると独我論に陥り、現実との通路を失ってしまう。本来のロマンとは単なる夢想ではなく、現実に人間が生きる上での憧れを意味する。自ら抱くロマンの妥当性を他人との間で探ることを通じて、自我のありようをたえず刷新していくべきなのである。

解答

問1　私は文章力と洞察力に自信を持ち、小説家を志していた。それで高校二年生の時に文藝賞に応募したところ、単なる「佳作」で、選評で一言も触れられないという結果に終わった。このように、当人だけの憧れ含みの思いは、他者を含む現実に直面することで滅殺されるということ。〔127字・解答例〕

問2　自分が何であるかについての憧れを伴った像　〔20字〕（2～3行目）

問3　ア・オ

問4　自分の持つロマンの妥当性を他人との間で探り、そのことを通じて自分自身の存在を絶えず刷新するように生きるべきである。

〔57字・解答例〕

【問題】（自習／共通問題）

出典…鷲田清一『モードの迷宮』／お茶の水女子大学　99年

文章略解

わたしたちは可視性の中に身を置いているが、自分の存在を自分自身で見ることはできない。したがって想像力によって作り上げた自分のイメージと、鏡や写真の自己像とのギャップに不安になる。そうした不安を覆い隠すために、わたしたちは恒常的な自己像を求め、自らの可視性に手を加える。しかしながら顔料や布地による可視性への物質的な介入という行為それ自体が内面の脆弱さを曝すことになるため、これは永遠に夢でしかない。

解答

問1　可視的な皮膜（48行目）

問2　自分自身で見る自分の顔は鏡を媒介としたものでしかなく、他人が見るものとは異なるということ。〔45字・解答例〕

問3　なイメージ（36行目）

問4　きちっと糊づけされ、封印された〈わたし〉の署名入りの封筒（45～46行目）
おのれをすっぽり包みこみ、密封してくれる被膜（46～47行目）

問5　可視性としての自分の内面は脆弱で実質が乏しく、想像力で埋めることでしか作り出せないものだということ。〔50字・解答例〕

問6　可視性に手を加えて覆い隠そうとする試みそれ自体が、自分の内面の脆弱さを示すことにつながってしまうから。

問7　「自己についての意識」という含意のある分析対象であることを明示し、単なる一人称とは区別するため。〔48字・解答例〕

〔51字・解答例〕

解説

問1　こうした抜き書き問題に際しては（**問3**・**問4**も同様に）、解答として抜き出すべき部分の備えている「条件」を抽出していくことだ。形式面の条件は設問の指示をよく読むことから、内容面の条件は該当部分の文脈を検討することから、それぞれ見出せるものだ。

まずは形式面から。「第八段落以降の本文から」という指示は、第八段落以降（このテキストでは32行目以降）に用いられている語句から解答を導く（それ以前にしか登場しない語句ではない）という意味に素直に読んでおこう。また「六字の部分」という指示も、それ以上でもそれ以下でもなくジャスト六字でまとまった部分……ということだ。

次に内容面。この傍線部分の「表面」とは、同じ段落の中で「わたしたち」が「身体の可視性にいつも何らかの加工を施している」（4行目）ことの例として「身体の表面を傷つけたり……」と挙げられている文脈に登場する語である。だとすれば、「身体の可視性」「身体の表面」に相当する、あるいは類似の意味を持つ語句を探していけばいいわけだ。そう押さえて32行目以下の問題文を追っていく。

「可視性」に相当する六字の語句は「可視的な存在」（29行目ほか）・「可視性の空間」（44行目）・「可視的な皮膜」（48行目）など、該当する部分の表現の中にいくつか見られる。そのうち、「表面」に最も近いニュアンスのものは「皮膜」であろう。おそらく出題者の想定した解はここであろう。

なお、この「可視性」は「『内部』を蔽う皮膜ではなくて、〈わたし〉がそこに次々と書きこまれては消されてゆく表面である」（51〜52行目）という表現がある。これを単純に読むと「……皮膜ではなく、……表面である」つまり、「皮膜」と「表面」は別物として筆者に捉えられているようにも受け取れるが、よく読んでみればこの表現は、「皮膜」＝「表面」が、〈わたし〉の「内部」をきちんと蔽うものではなく、次々に書き換えられる無防備なものだ……という性質を指摘したものであるとわかる。ここの表現に照らしてみても、筆者が「皮膜」と「表面」とを同じ意味で用いていることがわかる。

問2　「何が『当たりまえ』なのか」を指摘するということは、ここでは傍線部分直前の「それ」の指示内容をまとめていくことになる。この「それ」の内容については、続く叙述の中に述べられている。「わたしがはじめて見たその顔を、彼女は毎日鏡のなかに見ているということ」（26行目）・「わたしが毎日見る彼女の顔を彼女自身は知らない。顔だけではない……」（27行目以下）ということだ。これらを一般化する形で解答をまとめていけばよい。

「わたしがはじめて見たその顔」とは、前段落の「車を運転しながら斜め上のバックミラーに目をや」ったときに、「鏡のなかに、見なれたひとりの女性の顔が映った」とき（22～23行目）を指している。ある人の顔というのは、他者は通常直接に見るものであり、したがって鏡を通してみると違和感を覚える、ということだ（Ⓐ）。しかしながら、その本人にとっては、自分の顔とは「毎日鏡のなかに見ている」ものなのである（Ⓑ）。

このⒶ・Ⓑの両者が指摘できて、そのうえで双方が異なるということが述べられていれば、出題者の要求を満たした解になろう。

問3　この設問の場合には、「三十字の部分」とあるところに注目。「三十字以内」ではなく、三十字ちょうどの連続する表現である、ということだ。このことを踏まえつつ、内容面での条件を探していこう。

この傍線部分にいう「〝いつもの顔〟」は、直前の「〝歪んだ顔〟」と対比されている。この「〝歪んだ顔〟」は「街を歩いていて思わぬところで鏡に映った自分にばったり出くわすとき」（37行目）に見える自分の顔を意味している。それはさらに前段落の「仲間といっしょに撮った写真」における「自分の顔」（33～34行目）と「同じよう」（37行目）なものだとされているのである。これらの「自分の顔」は、「想像のなかでしか手に入れられない」（32行目）ものではなく、他者にもわかる可視的な存在である。この可視的な存在と、「想像のなかで、いわば手さぐりで構成した自分の可視的なイメージ」との間に「かすかな誤差」（35～36行目）が生じるから、それは「〝歪んだ顔〟」になるのだ。だとすれば、これと対比されるべき「〝いつもの顔〟」に相当するものは前述の「想像の……可視的なイメージ」の部分。ここがジャスト三十字である。

問4　傍線部分を含む文の後に、この傍線部分を含む記述を踏まえた形で展開されている記述を追っていこう。

①わたしたちは、

「自分の支点となりうるようなある恒常的な可視性」(a)

を手に入れようともがいている。

↓

けれども、（45行目）

②「きちっと糊づけされ、封印された〈わたし〉の署名入りの封筒」(a)—a

を〈わたし〉の存在に求めることはできない。

↓

③「おのれをすっぽり包みこみ、密封してくれる被膜」(a)—b

はどこまでも欲望され、夢みられるだけ

この①→②→③の論理展開を追っていくと、(a)・(a)—a・(a)—bがいずれも「求めようとして、実際には得られないもの」という点で同値になっている。しかも(a)—aの「……封筒」にしろ、(a)—bの「……被膜」にしろ、文字通りの封筒や被膜を意味するわけではなく、比喩的な表現である。だとすれば、出題者が求めている部分はおそらくはこの二箇所であろうと推察される。

なお、最終段落にも「〈わたし〉をすっぽり包みこむ被膜」（54〜55行目）という表現があり、(a)—bとほぼ同じ意味になっている。ここも許容解かも知れないが、傍線部分に言う「恒常的」（＝常に同じ・不変のもの）に相当するニュアンスを欠く点で(a)—bには劣る。(a)—aなら「きちっと糊づけされ、封印された」の部分が、(a)—bなら「密封してくれる」の部分が、それぞれ「恒常的」のニュアンスに相当している。

問5　前問との関連で考えていけばよい。傍線部分の直前にある「〈わたし〉は……自分を象ったり、その内部に自分を閉じこめようとする」（48〜49行目）という表現は、**問4**で検討したところの「自分の支点となりうるようなある恒常的な可視性」を求める営みに通じるものである。しかしながら、そうした確固たる可視性というのは自分の「内部」には求めえないものであり（＝「それを〈わたし〉の存在に求めることはできない」・46行目）、夢みられるだけのものである。したがって、ここに言う「空虚な内臓」とは、そうした確固たる可視性のない「内面」のことを意味するものと解される。こうした「内面の脆弱さ」に相当する内容が解答の核になる。

では、こうした「内面の可視性」はいかなる意味で「脆弱」「空虚」なのか。これに関しては、**問3**で検討したように、「自分の

可視的な存在を想像のなかでしか手に入れられない」（32行目）という表現が手がかりになろう。要するに「確固たる可視性がない」ということは、裏を返せば「想像に拠るしかない」ということなのだ。この点の指摘もあるといい。

問6　前問で検討したように、「〈わたし〉の可視性」とは、脆弱な内面を持つものである。確固とした「内部」を持たず、したがって「〈わたし〉がそこに次々と書きこまれては消されてゆく」（51～52行目）ということになるのだ。そうした脆弱さ＝「無防備さ」（54行目）をカバーしようとして、「顔料や衣服を用いて〈わたし〉の可視性に干渉し、それを別なものに仕立て上げようとする」（55～56行目）わけだ。

しかしながら、そうした試みはそもそも、「〈わたし〉の可視性」の脆弱さを前提としているため、その脆弱さの再確認にしかならない。言い換えれば、〈わたし〉の無防備さを覆い隠そうとする試みによって、別の面での無防備さが認識されてしまうわけだ。だから「終わりのない営み」ということになるのである。

こうした筋での指摘ができていれば、出題者の要求を満たした解になろう。

問7　問題文中で「〈わたし〉」と〈　〉でくくられている表現と、単に「わたし」とだけされている表現との両方があることに注意したい。筆者はその両者に意味上の区別を与えて使い分けをしているのだ。

カッコのない「わたし」の用法の意味するところについては、「わたしがはじめて見たその顔を……」（26行目）などの部分に端的に表れているであろう。ここでの「わたし」とは筆者自身を指す一人称の代名詞である。同様に、問題文の冒頭から頻出する「わたしたち」という表現（カッコなし）も、一人称複数の代名詞であり、筆者を含む人々一般を指すものである。

では、これに対して「〈わたし〉」（カッコつき）の含意は何か。用例を見てみよう。

○　それぞれの〈わたし〉は……可視性の関係空間から紡ぎだされる（1～2行目）

○　〈わたし〉はどのようにしてひとつの形象＝肢体たりうるのだろうか（3行目）

○　〈わたし〉の存在そのものが（17行目）

○　〈わたし〉という存在（42行目）

○　〈わたし〉の脆さ（43行目）

この後も「〈わたし〉」に関わる記述は多いが、これらの特徴を抽出するなら、「認識・分析の対象概念として用いられている」ということ（Ⓐ）、「自分についての意識」をも含んだ広い概念であるということ（Ⓑ）の二点となろう。このⒶ・Ⓑの双方が指摘できれば、出題者の要求を満たした解となろう。